

千空研究

第3号



五所川原の千空句碑

千空句碑が、1990年(平成2)6月9日有志により五所川原市菊ヶ丘運動公園の一郭、市立図書館向いに建立された。

大粒の雨降る青田母のくに

句集『地霊』では「故郷」となっているが、碑では千空さんの揮毫で「くに」とかな書きされた。

エッセイ集『俳句は飲みの文学』にも、「現在の私は『母の故郷』を『母のくに』と表記します。戦後の私にとって、神州とは母の国なのでした」と述べている。

戦後、千空さんは母の郷里飯詰村で農業をしていた。除草をしていると俄か雨が降り、青田のざわめきの中で口を衝いて生まれた句だった。

写真は、ふかうら文学館のビデオ撮影のためディレクターと打ち合わせ中の一齣である。

左隣には、師である中村草田男の「炎熱や勝利の如き地の明るさ」の句碑がある。2002年(平成14)11月4日、千空さんが中心になって建立したもので、この二つを「師弟碑」と呼んでいた。

師弟の碑雪ふるときは雪の中

(十方吟)

目次

五所川原の千空句碑	1
成田千空における風土と民俗	2
〈回想の成田千空〉	3
貴重な千空さんの「言葉」	3
寒夕焼	4
佐々木とみ子	4
思い出	5
櫛引麗子	5
歳時記に採られた千空句②	6
『北海道東北ふるさと大歳時記』	6
父・米田一穂と千空	7
米田省三	7
青森萬緑会通信句会誌『未来』を中心として②	7
千空俳句の礎②	8
西谷ともえ	8
永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々②	9
津軽詩話会と佐々木榮造さん	9
齋藤美穂	9
〈千空点描〉千空さんの帽子	2
〈成田千空資料再録〉③	12
寄贈感謝・会員名簿・北極星	16

千空研究会の事業

- ① 詳細な年譜の作成
- ② 千空俳句データベースの作成
- ③ 関係資料の収集
- ④ 関係者からの聞き取り
- ⑤ 会報『千空研究』の発行
- ⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

成田千空における風土と民俗

小池 淳一

一

成田千空は津軽に生まれ、津軽にこだわった俳人である。その句のなかには津軽の風土や民俗が溶かし込まれ、脈々と息づいている。千空の残した俳句をそうした風土と民俗の観点から見つめ直してみたい。

鯰太る津軽にいまも暴れ川

この暴れ川は岩木川だろうか。洪水をくり返す川に太った鯰が潜んでいるという空想、あるいは実景からは鯰が地震をはじめとする災害を引き起こすという俗信が思い起こされる。川の力を一身に集めたかのように丸まると太ったその姿に津軽という風土のあらゆる生命が凝縮されているようだ。

万緑や林檎の木にも父母祖父母

津軽と言えば林檎という感覚は歴史的には決して古いものではない。林檎栽培が津軽の主要な産業となったのは明治以降のことだから、津軽の歴史のごく新しい部分を林檎がいろどっているに過ぎないはずなのだが、林檎の葉、そして幹を見つめていると、そうした樹の姿に先祖たちのおもかげが宿っているかのように感じられてくる。草田

男の有名な万緑の句が幼子の命をうたいあげたのに対して、この句は万緑の中に祖先から続く命の刻印を読み取るうとしている。

そうした津軽人の血統意識は次の句にも示される。

ぎざぎざの蝦蛄剥く我は何の裔

見ようによつては奇怪なシャコエビの殻を素手で剥き、むさぼる自己にも投影されていく。風土とは過去との対話であり、民俗はその継承である。さまざまな行事や祭礼をくり返して、毎年毎年新たな生命を吹き込む行為は、千空の俳句では追憶と発見とによって、ふちどられている。

二

木々が生い茂ったことで生まれる闇を下闇とか木下闇などと呼ぶ。夏の日差しのみぶしさとそれをさえぎる木々の葉によって生まれた影の部分との対照が、津軽の短い夏を印象深くする。

下闇に山祇の注連太きかな

これは山の神を祀る神社の鳥居にかけられたしめ縄を詠んでいる。祭りに際して、太く大きなしめ縄を力を合わせて作り上げ、奉納する。風土のなかでくりかえされてきた民俗である。その伝統の確かさが、しめ縄の太さへの詠嘆となっている。

干鰯を骨まで煮しめ田植どき

この句は田植の際に田の畦で広げられる弁当の中に入っていた鰯の味の追想だろう。堅く干上がった鰯を水で戻し、調味料を加えて、骨まで食べら

【千空点描】

千空さんの帽子

千空さんは、改まったときにはベレー帽をかぶる。ダンディでなかなか格好よい。ふだん、夏は登山帽、冬は毛糸の帽子をかぶる。千空さんが訪ねてくると、帽子をひよいと椅子の上や窓枠に置くのでよく忘れる。帰りに玄関を出てから「帽子忘れでないか」と戻ってくることも多い。

千空さんの帽子忘れは昔からのようで、

雪帽子馬具屋に忘れ来しと思ふ（地霊）

という古い句がある。

馬具屋といっても知らない人が多いだろう。馬に鋤を牽かせて田んぼを耕していた時代、鞍や首輪を作る職人がいた。そんなところに用事があったのは、千空さんもかつては農民だったからだ。

〈佐〉

をとめ子に漆の瞳田の祭

田植は華やかに着飾った早乙女たちの登場で、あたかも祭りのような興奮に彩られる。その早乙女役の少女の瞳を漆に喩えるのは凡庸ではない。早乙女の瞳をとらえる感覚は俳人のものであり、そこに漆の輝きを見出すのは津軽びとが培ってきた感受性であろう。そして、そうした津軽の感性は、千空にとっては、視覚だけにひらかれている

のではない。

憂さ晴らす太鼓もあらむ虫送り

これは虫送りの際に鳴り響く太鼓の音への注意である。田植が終わって、春先の水田での長い労働を締めくくる行事が津軽の虫送りである。その太鼓の音は、労働の辛さ、憂さを一気にはらいのけるようにするかのよう力強い。それを聞き取る耳はもちろん、津軽びとの耳なのである。

津軽の民謡もさまざまな哀感を人びとの心に刻んできた。

身にしむや米ならばよき十三の砂

この句には有名な「十三の砂山」の唄声が響いている。「十三の砂山 米ならよかる 西の弁財衆に ただ積ましょ」という、津軽の海辺の砂浜と日本海を往還した北前船の記憶によって生み出されたこの民謡が、千空のなかで思い起こされ、砂浜が歴史の舞台であったことが意識のなかに蘇ってくるのである。歌声が身にしみただけではない。この民謡を想起しながら砂の連なりを眺めるとき、津軽の海をめぐる歴史が身体の内なかにみこんでくるのである。

風土と民俗を考えることは、津軽の人びとの身体を通して記憶され、表現される歴史を見出すことでもあった。千空の俳句はそうした歴史をいくつもとらえている。最後、林檎を詠んだ句を掲げよう。ここという光陰とは歴史の別名であり、林檎は人生の投影である。

林檎甘し酸し光陰はただ逝し

(国立歴史民俗博物館教授／民俗学／東京都)

回想の成田千空

貴重な千空さんの「言葉」

阿保子星

成田千空さんが、俳壇の文化勲章といわれる第32回「蛇笏賞」を、県人として初めて受賞したのは平成10年(1998)であった。その受賞を祝う会が同年7月5日、青森国際ホテルで開かれた。

祝賀会には県内の俳人を中心に文化関係者ら約160人が出席した。初めに発起人を代表して加藤憲廣県俳句懇話会会長が「成田さんはどんな人にも同じく接し、決して威張らないので、全県的に尊敬されている。受賞は青森県の名誉である」とあいさつ。

つづいて木村守男知事が「控室で成田先生に俳号について聞いたら、俳句をやっていたあるとき、俳号がなければならぬと言われ、名付けたのが千空だった。本名が『力』から』なので、それを振っただけだ、と聞いたが、俳句に門外漢の私に分かりやすく言ったのかもしれない。本当は立派な由来があるのだろう」と前置きをしながら「成田先生の受賞は青森県の誇りであり、今後県民の文化向上のために尽くして欲しい」。

また、小野正文青森中央学院大学客員教授は「千空さんは人間文化財。優しい目で県の俳句を、そして五所川原から日本の俳句を見詰めて欲しい」。

暖鳥俳句会主宰の新谷ひろしさんは「私は千空

という山を見ながら過ごしてきた。末長く指導して欲しい」と、それぞれ祝辞を述べた。

市子夫人とともに花束を受けた千空さんは、

「昭和16年に俳句をはじめ、吹田孤蓬さんとの出会いが私に大きな影響を与えた。俳句は一生の仕事に値するのか、虚構ではないのか、最初から自己否定の考えにこだわりのあった。成功と成就是違うと思う。受賞した句集『白光』は不満が多い。山河や人々や懐かしいものからは、すべて恩を受けている。これからもどこまで生きれるか頑張ってみようと思っている」と、謝辞を述べた。

私はこのとき、陸奥新報五所川原市支社長職にあったためか、前列の席だった。だから、千空さんの含蓄のある、興味深い言葉に一言一言を噛み締めるようにして聞いた。

千空さんは陸奥新報社とは昭和30年代から、船水清(以南)さんや、泉嶺(風信子)さんら歴代文化部長とは親交が深かった。私も文化部長に就いた数年後の平成9年、五所川原支社へ転勤になっていた。早速、千空さんにあいさつに行ったら、「俳句を作るには、ここはいい環境だよ」と、励まされた。このときからよい親しくさせてもらった。

毎月2、3回は千空さんの仕事場「書店」に通い、添削して頂いたり懇談のときを持った。いつもおおかたで親切に対応してくれた。ガラス戸を開けて行くと、「今日は何句持ってきた。どれ!」と言って見てくれた。そして帰り際に「発句のときはよく自然を見て歩け。津軽の風土だ。句材がたくさんあるのだから——」と言っていた。

私はたいいてい午後に行くのだが、あるとき、千空さんがこんな話をしてくれた。「毎月届く五千

にもおよぶ俳句を一週間かけて作品の選句、添削、そして原稿の執筆にと精力的に消化しているが、もう17年になった。ちょうど今日は一段落したので——」と自分が俳句に入った動機など話してくれた。

「青森の工業学校を卒業して上京したが、体を悪くして療養のため、実家に戻った。そのとき俳人の夫を持つ姉の寿栄が勧めたのが俳句だった。松涛社、青森俳句会と創作の場を移した。昭和20年7月28日、青森市はB29爆撃機の空襲に遭った。この夜、警報が鳴るまで句会を開いていて、(千空さんたちは)夜明けの町で此の世の地獄を見た。いたるところに死体が転がっていた」。この話を聞いて背筋が寒くなるとともに、俳句に対する執念をみたような気がした。

俳号については「安らかな無心にあこがれ、空を見上げる癖があったためと、本名の力を振った程度というか、そんな内容です」。

千空さんは平成16年10月、五所川原市の名誉市民の称号を贈られた。その翌年の10月13日、板柳町で開かれた県下津軽俳句大会で千空さんと会ったとき、「俳句は自分の生活や世界を詠うことだよ。感動のない日はないんです。自分の世界、感性を大事にすることだよ」と声をかけてくれた。

平成17年7月10日だった。洪柿園俳句会・藤田枕流代表の第2句集『古稀』の出版記念会が弘前で開かれたとき、千空さんは祝辞のなかで、「俳句は言葉の追求であり、言葉を磨くことである。自分の素材、世界を持ってほしい」と話した。

懇親会の席へあいさつに行った際、千空さんが、「ふかうら文学館へ行きましたか」と、私に聞いたので、近いうちに行く予定になっていると言う

と、「資料がたくさんあるから、館長さんにお願

いしてみるといい」ということだった。

私は会社の「西海岸の歴史探訪」が予定されていることを話した。どうして深浦に記念館を造ったのですかと聞くと、「深浦の町が好きなのです」と言った。

平成19年(2007)11月17日、86歳で亡くなったが、訃報を聞いたとき、千空さんの一言ひとことを思い出していた。

(本名敏秋／此岸俳句会／弘前市)

寒夕焼

佐々木とみ子

総合誌「俳句」が平成二十年二月号に追悼特集「成田千空の生涯と仕事」を掲載した。扉に目を細めた千空の笑顔と、千空をよく知る著名な方々の追悼がずらりと並び、胸が熱くなる。黒田杏子が句集「十方吟」のお祝の電話をしたとき、千空はこう言ったそうだ。

「あの句集はちょっと優しく、柔らかになりすぎてねえ。私としてはもう一冊、なんとか骨のある水位の上った、口あたりはよくなくても喰いたい作品で飛翔したいんですよ。分って頂けるでしょう。それが出来そうな感じもいまあって、何とか実現したいんです。私の到達点をそこに持ってゆきたい。『十方吟』を通過した最後の句集をねえ」。

そのお話は私も伺った。平成十九年七月二十九日、青森県芸芸賞を頂き、千空先生の手からじか

に賞状を受け評をして頂いた。祝賀会の席で隣に座らせてもらったが、そのときすでに顔いろも悪く体調が悪そうだった。なにも食べたくなかった。おっしゃる。そうだろう。それから三ヶ月と少しで亡くなるのだから。県内の会合ではあれが最後ではなかったかと思ひ、私は、私のために苦しいなかを出席して下さったという気がして、このご恩は生涯忘れることはない。その折にあと二年生きてもう一冊句集を出したいと言われ、決して満足することのない作家の執念というものをかいまみた気がした。

第一句集「地霊」が世に出た昭和五十一年頃はまだ句集発刊が数少なく、私などはバイブルのように手許から離さず読み返した。

大粒の雨降る青田母の故郷

防雪林あを持つ母のいまも貧し

野は北へ牛ほどの藁焼き焦がし

滾々と雪ふる夜空紅きざす

密林のごとく雪降る火の捨て場

青田も防雪林も藁焼きも、灯のにじむ雪の夜空も、同じような情景と出会うたびにすぐこれらの句が浮かんでくる。千空の句が立ちはだかつて圧倒されそこを越えることができない。くやさしに「野はア北えエー」と北風に吠えながら歩いたという仲間もいた。その飢餓感がよく伝わってくる時代でもあった。

第二句集「人日」の刊行はそれから十二年もあとで、この句集で第二十八回俳人協会賞を受賞し、この年から亡くなる直前まで十九年「萬緑」の選者をつとめた。しかし「地霊」の高揚感にどっ

りと漬かっていたもので、「人日」の平明さに一瞬肩すかしを食ったような気がした。鮮烈な痛みはもう影をひそめ、さりげなく実に穏やかな表現である。この十二年間の沈潜を重ねたその内面を、未熟者の私にはまだ読みとることができなかった。

何度も読み返すうちに、平明なことばの持つ美しさ、平明であるために沈めた思念の多さなどが少しずつわかるようになった。そのまなざしの暖かさは同量の悲しみであったのだろう。千空さんはどんな人にも親身になってくれたし、受け入れてくれた。それだけに自分に対しては円の中心点のように、厳しく寂しかったのではないかと思う。五所川原俳句大会に私ら青森勢が行くのをとても楽しみにしてらして、ある時予定していた飲み会場が休館だったので、「ちょっと待ってへ」と暑いなかご自分で自転車漕いで、別の場所を探して下さった。「萬緑」の選者の大先生がである。あまりにも身近なために、千空の存在の偉大さを地元の私らは知らなかったのかもしれない。だがこれほどの郷土の俳人は再び現れるのだろうかと思う。俳句においても人物においても。数ある作品の中でも特に心に残る句。

食べてゐて食べるものなく雪が降る

平成六年刊行の第三句集「天門」所収。千空七十三歳。名句百選などでも、この句はとり上げられていない。「風土性」に焦点をあてた場合洩れこぼれるのだろうか。

機械化、合理化に慣れ謙虚な暮らしを忘れ、過飽和のなかでまだ足りない。「食べてゐて食べるものなく」と世の中を見まわし、降る雪を見ている目がとても寂しい。

私は直接には佐藤鬼房と成田千空を生涯の師と慕っている。鬼房の俳句は厳しく、鬼房からは地獄を、千空からは天上を教わってきたと思っていた。その鬼房の最期の句が、

暖かな海が見ゆまた海が見ゆ 鬼房

であり、あの温和な慈眼の千空の最期の句が、

寒夕焼に焼き亡ぼさん癌の身は 千空

なのに私ははげしい衝撃と感銘を受けた。

ま逆とも思える二人の師の遺句に、命のきわみの声を聞く思いがする。

「分かって頂けるでしょう。口あたりはよくなくても喰いたる作品で飛翔したいんですよ」と言った幻の句集の第一ページが、この「寒夕焼」から始まっているのだ。

(俳誌「小熊座」「黒艦隊」所属／青森市)

思い出

櫛引麗子

私が「萬緑」に入会した平成七年ころ、千空先生の店は貸本屋ではなく書店(大方俳句雑誌)だったが、なんとなく雰囲気は昭和の匂いだった。昔、文学や芸術を愛する仲間が集い、ちょっとしたサロンのようだったとお聞きしたが、私が入りし始めたころはその仲間もめったに見られず、先生の静かな書斎兼書店だった。

市子夫人が先生を「だんちようさん」と呼んでいるのが不思議で、昔「暖鳥文庫」という貸本屋だったこと、お店を先生のご自宅と思っていて借家と知ったのはずっと後だった。建物が古く奥の

方の台所は大家さんとの共同使用で、昔懐かしいコンクリートの流し台だった。

昔、市子夫人が嫁いだころは、水道もなく井戸水の汲み方も分からない。蝋燭の灯で茶碗等の洗い物をなされたこと、大家さんと襖一枚隔てた借家の六畳間で不便な暮らしは、昭和四十二年ころ、元町に御夫妻の家が新築されるころまで続いたと、市子夫人からお聞きしたことがある。

千空先生がご逝去なされた三年ほど前のある日のこと、お店の二階へ本を運ぶからとご夫妻に手伝いを頼まれた。階段を上った突き当りの六畳間は、右手に先生の洋服箆笥、左手に古い足踏みミシン等が置かれた障子窓の薄暗い部屋であった。

階下では昭和二十年代、草田男創刊号からの薄茶のわら半紙の「萬緑」誌が、お店の隅から湧くように出てくるので、先生はそれを大切そうに揃え乍ら束ねていらした。それを市子夫人と私は仄暗く細い階段を、繰り返して上り下りして二階へ運んだ。あまりにも細い階段で、「萬緑」誌もろとも落ちたら怪我するので極力神経を使った。ふくらはぎのばんばんに張ったこのことも今は懐かしい。中村草田男没後、香西照雄、北野民夫を経て平成元年より千空先生は四代目の「萬緑」の選者でしたので俳句のお仕事で多忙だった。

ご自宅を、朝の六時頃愛用の自転車で行くお店に入られる。市子夫人は午前十一時頃、運動になるからといって徒歩でお店へ。

たまに知人や俳句教室の人がお店に顔を出すと、ご夫妻は事のほか喜んで下さった。

俳句雑誌が山積みになっている陰の、市子夫人とやや斜向かいになる所に私の座る椅子がいつも用意されていて、そこは千空先生から見えない場

所なので気楽に立ち寄らせて頂いた。時折り、市子夫人のご機嫌斜めの事があり、先生にエスカレートする場面にも出会ったが、先生は眉を八の字になさるだけで夫人にとりあわないので、安心してそこに居られたような気がしている。

ご存じの通り、千空先生の年譜を拝見すると、数々の賞を総なめにしたという感覚があり、驚くばかりである。

第一回萬緑賞。青森県文化賞。俳人協会賞。

東奥賞(東奥日報社)。勲五等瑞宝章。蛇笏賞。日本詩歌文学館賞。



棒稲架前の千空先生(筆者撮影)

平成十年に蛇笏賞を受賞した折、「俳句朝日」誌「近影近詠」の専属カメラマン、大倉舜二氏が千空先生をお撮りになるため、青森にお出でになられ、千空先生は十三湖へ案内された。十三湖へ向かう途中、大倉氏が「これも興味を示したのが刈田に並ぶ棒稲架。『これは珍しい』と、先生を田畦にお招きしては棒稲架をバックに夢中でシャッターを切っていた。十三湖では出店の前の丸テーブルで先生はにこやかに蜆汁を振舞って下

さった。

帰り道、太宰生地の金木町で遅い昼食をとる事になった。運ばれて来たカレーライスを食べ始めてまもなく、ふと気づくと千空先生がカレーをスプーンで掻き混ぜながら何か探しておられる仕草をしていた。そのことに最初気づいたのが大倉氏だった。千空先生は一体何をなさっているのだろうと、皆の眼は先生のカレーライスに注がれた。

「先生どうかなさいましたか? 何か探し物ですか」と私がお聞きした。先生は小声で言いにくそうに「入れ歯が無くなったんです」。義歯は何処を探しても最後まで出て来なかった。

しかしまだ、最後の撮影が残っているので、落胆ばかりもしておられず、先生はすぐ近くの太宰文学碑のある公園に移動したのだった。老松の前にどっかりとあぐらをかいたり、吊橋では太宰の例の頬杖のポーズをお決めになられたりで、撮影はどうやら無事に終わることができたのだった。

この数日後、今度は東京の講談社のカメラマンが見えた。この時は千空先生のご自宅で撮影した。しかし撮影後「あす鈴木真砂女さんに会うので」と言う多忙そうなカメラマンを、先生はまたにここにこと十三湖に案内する旨を伝えるのだった。私は先生のサービスピ精神の旺盛さを初めて知った。

その翌月東京から、著書四十数冊、著名俳人との対談も多いという村上護氏がお出でになり、先生は青森市内で落ち合う事に。このときは対談のあと、三内丸山へご案内した。ちょうど初雪が舞って、先生を先頭に村上護氏、市子夫人の順に並び、初雪の縄文の道を歩んだあの日の記憶が蘇ってくる。

(「萬緑」同人／五所川原市)

【歳時記に採られた千空句】②

北海道東北ふるさと大歳時記

春

春暁
ねむる子に北の春暁すみれ色
新郷山遠嶺をつなぎ光る風
春雪を踏みためらはず蝦夷にあり
残る白鳥海に風吹き砂を吹く
かたかたと木橋渡れば蜆村

雲丹

花屑

蒲公英の絮

峰雲

青嶺

苗取り

袋掛

万緑

麦の黒穂

俊武多

鳴

桐一葉

稲田

玫瑰の実

日短

嚴寒

雪晴

焚き火

鱈

年新た

手毬唄

かまくら

山背

新薬

木瓜の花

檜葉の花

紫陽花

夏

ねむる子に北の春暁すみれ色
新郷山遠嶺をつなぎ光る風
春雪を踏みためらはず蝦夷にあり
残る白鳥海に風吹き砂を吹く
かたかたと木橋渡れば蜆村

雲丹

花屑

蒲公英の絮

峰雲

青嶺

苗取り

袋掛

万緑

麦の黒穂

俊武多

鳴

桐一葉

稲田

玫瑰の実

日短

嚴寒

雪晴

焚き火

鱈

年新た

手毬唄

かまくら

山背

新薬

木瓜の花

檜葉の花

紫陽花

秋

ねむる子に北の春暁すみれ色
新郷山遠嶺をつなぎ光る風
春雪を踏みためらはず蝦夷にあり
残る白鳥海に風吹き砂を吹く
かたかたと木橋渡れば蜆村

雲丹

花屑

蒲公英の絮

峰雲

青嶺

苗取り

袋掛

万緑

麦の黒穂

俊武多

鳴

桐一葉

稲田

玫瑰の実

日短

嚴寒

雪晴

焚き火

鱈

年新た

手毬唄

かまくら

山背

新薬

木瓜の花

檜葉の花

紫陽花

冬

ねむる子に北の春暁すみれ色
新郷山遠嶺をつなぎ光る風
春雪を踏みためらはず蝦夷にあり
残る白鳥海に風吹き砂を吹く
かたかたと木橋渡れば蜆村

雲丹

花屑

蒲公英の絮

峰雲

青嶺

苗取り

袋掛

万緑

麦の黒穂

俊武多

鳴

桐一葉

稲田

玫瑰の実

日短

嚴寒

雪晴

焚き火

鱈

年新た

手毬唄

かまくら

山背

新薬

木瓜の花

檜葉の花

紫陽花

新年

ねむる子に北の春暁すみれ色
新郷山遠嶺をつなぎ光る風
春雪を踏みためらはず蝦夷にあり
残る白鳥海に風吹き砂を吹く
かたかたと木橋渡れば蜆村

雲丹

花屑

蒲公英の絮

峰雲

青嶺

苗取り

袋掛

万緑

麦の黒穂

俊武多

鳴

桐一葉

稲田

玫瑰の実

日短

嚴寒

雪晴

焚き火

鱈

年新た

手毬唄

かまくら

山背

新薬

木瓜の花

檜葉の花

紫陽花

地名編

ねむる子に北の春暁すみれ色
新郷山遠嶺をつなぎ光る風
春雪を踏みためらはず蝦夷にあり
残る白鳥海に風吹き砂を吹く
かたかたと木橋渡れば蜆村

雲丹

花屑

蒲公英の絮

峰雲

青嶺

苗取り

袋掛

万緑

麦の黒穂

俊武多

鳴

桐一葉

稲田

玫瑰の実

日短

嚴寒

雪晴

焚き火

鱈

年新た

手毬唄

かまくら

山背

新薬

木瓜の花

檜葉の花

紫陽花

*「春の月」「俊武多」「青森・津軽周辺」の解説。

ふるさと歳時記1『北海道・東北ふるさと大歳時記』

1992年6月25日発行／定価 本体1万5534円

編集財団法人角川文化振興財団／編輯委員代表加藤楸邨
発行者角川春樹／発行所角川書店／A4判上製、82ページ

父・米田一穂と千空

（青森萬緑会通信句会誌

「未来」を中心として（2））

米田省三

「未来」の編集三本柱は、千空による短評、互選結果発表（選んだ者の短評を付す）、そして互選句稿であるが、なんとと言っても目玉は千空の短評である。前回も記述したが、「批評はきびしいほどよい」とあるように、きびしい批評を覚悟で、というよりはきびしい批評を求めて出句するのである。いわば、この通信句会を絶好の鍛錬の場と捉え、皆目の色を変えて作句するのである。地方にあって、俳句を勉強する場は少なく、勢い独りよがりの狭い袋小路に頭を突っ込んで、にっちもさっちもいなくなってしまうっている俳人も多いが、そういう中で、木鐸となり、これからの俳句の進むべき道を指し示してくれるのが千空であった。

その千空の短評を少し見てみたいと思う。「隣も拓士早起雲雀と子等の声」という一穂の句に対して、「ここには文学的問題はない。しかし根っからの善意がある。……善意という前提から一步も出ていないところが、評価の限界である。」「未来」三三集）ここでの「文学的問題」とは、いわゆる草田男言うところの「俳句を構成する要素としての芸と文学」の「文学」のことである。すなわち「作者としての内面界に於ける、人生、社会、時代の生活者としての無制約の豊富な内容」であるが、その部分が欠如していると千空は指摘、

単なるお人好しの空騒ぎの句で、草田男と対決するという思いで、その理論、実作を磨いてきた千空にとって、内面的な葛藤の感じられない能天気な句は、評価の対象として扱うには値しないということである。

「黒の極みの黄よ冬の日のさらす喪服」（一穂）については、次のような評を付している。「黒の極みの黄よ」は対象に生々しく触発した表現でなく、思いをめぐらして作った間接的表現で、感情の核心を打ち出していない。抽象的で、むしろよそよそしい。」「未来」三五集）千空は、常日頃から、「原感情」を大事にしている。「原感情」については、「原感情を大切にしてい」俳句は「飲むの文学」において詳しいので少し引用したい。

「俳句をつくる場合、私は対象に触発した最初の感情または感覚を大事にします。対象は外部の自然界や人間界にかぎらず、内部の思考そのものが触発の対象になる場合もあります。しかし外部の自然界や人間界といっても、触発はすべて内部の出来ごとで、こいつはどこから来たか、詮索する間もなく最初に動いた感情を大事にするというわけです。これを私は仮りに原感情と名づけています。」

また、「萬緑」誌上でも、こんなことを述べている。「先ず、実感を素直に示すことでしょう。観念的、概念的な、作りものは駄目ですね。」「個々人が生きて生活している感動を偽りなく出すことですよ。」「実感は文学の基本的なものです。ヘそですよ。ヘそのない作品は駄目、と考えていいでしょう。」「萬緑」「新春東北座談会（昭和40年1月号）」「実感」「感動」、あるいはよく千空が用いるところの「エモーション」、これが大事であると。こ

れを表現するために苦勞しているわけで、小手先で捌こうとすれば、千空指摘のような句に終わってしまい、読むものにもまた感動を与えることができないのである。

「自在鉤に冬の蠅置き農華燭」（一穂）「一つの対象を設定しているにすぎない。かくある事実。それと作者の関係の中に作品のリアリティが打ち出される。それ以前のところでどまっている句。」「未来」三九集）大変手厳しい批評である。

千空は、第一回萬緑賞受賞の感想の中で、「作品は現実の反映に違いないが、現実とべた付きのところから作者は腐るだろう。作品はナマの現実と次元を異にしたそれなりのリアリティに依って存在を続けるに違いない。」と述べているが、いわゆる詩的現実と事実の問題であろう。事実をそのまま投げ出ただけでは作品とは言えず、事実とそこから触発された作者の感動が、俳句という形式でいかにリアリティを持った存在として提示されるか。そのせめぎ合いが一穂の句には不足しているということであろう。実はこの評言を受けてのことと思われるが、「未来」同号で、みず書房刊の『現代俳句全集』第四巻に「成田千空俳句集」が収録されたことを記念し、一穂が「千空さんを祝福する」という一文を書いているが、その中で、「千空さんは批評によく、「それ以前のところで止まっている」と書く。特に、そう書かれるのは私であるが、事実、千空さんは対象物をけっして生で出さない。完全に消化して詩としてのふんわりとした雰囲気豊かに我々に迫って来る。」と述べている。一穂にとって耳に痛い言ではあるが、その俳句的成長においては、良薬となったのである。

（俳文学会会員／十和田市）

千空俳句の礎 (2)

西谷 ともえ

前回にひきつづき、千空さんのエッセイ集『俳句は遊びの文学』の記述についての資料を紹介する。

エッセイによると、千空さんは松濤社で一年ほど活動したが、主宰の高松玉麗と、幹事で、自宅を句会に提供していた吹田孤蓬が仲違いをして、別の道を歩み始めたときに松濤社を離れた。しばらくは方言詩や小説を書いていたが、昭和十八年、孤蓬からの誘いで青森俳句会に参加するようになったという。



松濤社を辞めた千空さんは、しばらくは方言詩や小説を書いていたというので昭和十六年以降の『月刊東奥』を調査した結果、その痕跡を見ることが

が出来た。(作品については「千空研究」第2号に掲載) 「月刊東奥」第四卷第三号(昭和十七年三月)の伊豆能平(一戸謙三の別名。「一戸いづのへ」に由来)選方言詩のコーナーにはじめて方言詩が掲載されているが、初登場でいきなりの巻頭入選である。

「旋風(マワリカゼ)」と題した詩は四行で、青森市成田力と本名で投稿されている。前回も少し触れたが、俳句は昭和十六年四月発行の号以降の「月刊東奥」に掲載されており、こちらは成田千空の名で投稿している。但し、俳句も、昭和十七年二月号以降は千空、力の両方の名で掲載されている号もある。一人二句までの応募であったため、使い分けていたのかどうか気になるところである。方言詩に話を戻すが、この「旋風(マワリカゼ)」は翌月号で木村弦三によって曲が付けられた。

「月刊東奥」に小説作品が掲載された事はないようであるが、昭和十七年の八月号で「選外佳作Aクラス『恵之助』(成田力)」とある。本文の掲載がないのが残念である。

千空という俳号は病床で考え、自分で付けたという。また、子どもの頃から病弱だったため「力(ちから)」という本名が好きになれなかったという。県立青森工業学校の卒業アルバム(昭和十四年三月)に、クラスの寄せ書きがある。みな思い思いのメッセージを残しているが、千空さんはそこに「つとむなりた」とだけ書いた。

話を俳号に戻す。エッセイでは「力をもじったら空っぽになったので可笑しかった。」と書いている。石井露月と共に「俳星」を創刊した秋田の島田五空のことも頭をよぎったようだ。昭和二十七年一月二十五日付東奥日報夕刊に「わがホープ

俳句」と紹介された千空さんは記者に「千空―空が千もある。俺は空ッぽ、空という文字の仏教的解釈からつけた号」と語っている。

また、リルケの詩を読んで「千の空」という言葉に出会い感動している。その部分を引用する。

「二十代の頃、リルケの詩集を愛読した。『薔薇の葩』という詩の中に、こういうフレーズがある。

花びらは大空のひかりを透さねばならぬ
千の空からこぼれおちる翳の一滴一滴をし
ずかに濾過しながら
すると光の火焰のなかに花粉をつけた雄蕊
の束が

ゆらゆらともえあがるだろう

この時、〈千の空〉ということばに出会ったうれしさをおぼえた。さほどよい俳号とも思っていなかったが、わが俳号に俳と詩の願望が宿ったようである。同じ俳号の人はいないはずである。」

(「俳と詩の願い」『俳句は遊びの文学』)

この詩は、リルケが一九〇七年に発表した『新詩集』にあり、「薔薇の葩」、原題を「Die Rosenschale (Neue Gedichte)」という。リルケの詩は何人もが翻訳しているが、この詩を「薔薇の葩」と訳したのは大山定一である。大山はこの詩を昭和二十八年、『現代世界文学全集6 マルテの手記・ロダン』(新潮社)、翌二十九年に『リルケ選集1』(新潮社)、昭和四十九年に『近代世界文学26 リルケ』の三冊に掲載している。原文では

「Aus den tausend Himmeln」直訳すると「千の天上から」となるこの部分を大山は昭和二十八年版で「千の空から」と翻訳している。昭和二十九年版では「もろもろの空から」に訂正し、それは昭和四十九年版でも同じである。千空が手にしたのは『現代世界文学全集6 マルテの手記・ロダン』（新潮社）であるのは間違いない。昭和二十九年発行である。

平成二十七年七月一日、五所川原の千空さんの自宅にお邪魔して、蔵書を見せていただいた時、書棚に同書を確認した。一八七五年オーストリアのプラハに生まれたリルケは詩人であり小説家であり、評論家でもある。三十一歳の時に彫刻家ロダンの評論を書き上げるためにロダンに会い、彼の芸術観に感銘を受け、後に秘書となる。その頃、葛飾北斎や鈴木春信の浮世絵を見て浮世絵に興味を持つ。三十五歳の時、ロダンと不和が生じ、彼の元を去る。その頃『マルテの手記』を書き上げた。『マルテの手記』は自身の幼少期の記憶と、現在の抑鬱的な生活が入り混じって、脈絡のないメモをつないだような小説で、太宰治の「晩年」を思わせる作品である。千空さんが二十代の頃にこの本を手にとったきっかけはわからない。リルケは当時の日本の文壇、特に堀辰雄、立原道造ら「四季」派の詩人に影響を与えた詩人として、また、北斎の富嶽百景が主題となった作品や俳諧に影響を受けた作品などがあったため日本人に広く読まれた。棟方志功や太宰治に憧れていた千空さんが、ロダンという彫刻家や浮世絵に影響を受けたリルケに、また、『マルテの手記』や『新詩集』等の作品に魅了されたのは想像に難くない。

（青森県近代文学館主幹／青森市）

―永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(2)― 津軽詩話会と 佐々木榮造さん

齋藤 美穂

ジャンルを超えて文化活動を

昭和26年、五所川原に詩と俳句と短歌の会「津軽詩話会」が生まれました。発起人は佐々木榮造さんです。佐々木家は五所川原の商業発達の歴史に名を残す家柄で、佐々木さんは後に五所川原市長を務めています。当時31歳、五所川原青年会の副会長として、戦後の新しい仲間作りに着手していました。

一方、千空さんは30歳、飯詰村の帰農生活を始め、五所川原にささやかな本屋を開業してから1年が経とうとしていました。5月に結婚、8月には青森県下俳句大会に招かれた俳人・中村草田男と行動を共にするなど、その後の長い人生の起点となる出来事が相次いだ年です。生活のための書店経営はもちろん、俳句の将来を見据え、その道に賭けるという自負がみなぎっていたのではないのでしょうか。

五所川原に独自の文化を根付かせようと結成された「津軽詩話会」の実際の活動はどのようなものだったのでしょうか。町の新聞を機関誌代りにした」という記述を手がかりに当時の新聞をたどってみました。

詩話会の活動を追って（千空関連の記事を抜粋）

▼陸奥新報 昭和27年1月27日
〈津軽詩話会作品抄〉俳句 短歌 詩
さぐめ雪嘘にくるしむ眼の黒眸（他3句）

▼陸奥新報 昭和27年3月9日
〈津軽詩話会作品抄〉詩 俳句 投稿募集

寒さはやよりの戻らぬ鮑屑（他4句）

▼陸奥新報 昭和27年4月20日
〈津軽詩話会四月作品集〉詩 短歌 俳句

しゃぼん玉あはや因果律・確率・平和（他4句）

▼陸奥新報 昭和27年5月25日
〈津軽詩話会作品抄〉短歌 俳句

懸河一途せきれの尾の軋みとぶ（他5句）

▼陸奥新報 昭和27年7月27日
〈むつみ吟社一周年記念句会抄（北郡中川村田川）〉

夜の雷看板多き町にはげし（他1句）

津軽詩話会提供

詩話会が当初作品を掲載したという「五所川原新報」は現存しないため、結成後半年間の内容は確認できません。隔日刊の小型紙「五所川原新報」の廃刊後、発表の場を「陸奥新報」に移したものと考えられます。

記事を追うと、五所川原青年団事業の文化部10団体の先頭に「津軽詩話会」とありました。詩話会の作品内容を見ると、俳句の参加人数は安定していて作品数も多く、千空さんを中心としたこの勢いが、やがて「五所川原俳句会」誕生へとつながっていくことが想像されます。

発見された「津軽詩話会総合雑誌」の謎

平成27年5月、俳人・増田木亘子の自宅書架から発見された「津軽詩話会総合雑誌」は、52ページ

ジから成り、詩10名、俳句15名、短歌8名から作品が寄せられています。陸奥新報での発表が途絶え、その後にこの雑誌が発行されたことになりました。主な内容を次に掲げます。

「発刊に際し」 公民館主事 葛西國四郎

「祝発刊」 林柁次郎

「詩神につかひして」 佐々木遠城

「詩」 一戸呉六（青森）、佐々木遠城、工藤啓七、

黒田樹郎、北村敏、岩谷響子、佐々木正美、坂本善正、三上悠三郎、対馬秀緒

（黒石）

「俳句」 成田千空、小山内牙城、寺山常三、長尾

砂丘、三上悠三郎、齊藤吟雨、大久保巖

平山五朗、西澤昌子、中村葉子、若崎三

平、高橋興四郎、吉崎善太、幽言堂、五

中校ドリアン

「短歌」 ていひらやま、柳谷順子、にしはじめ、

石塚順、中村洋子、扇谷麗子、岩谷響子、

柴野宇一郎

「編集員一同に代って」 柴野宇一郎

「奥付」 昭和二十七年八月十日 印刷発行

総合文学雑誌「点」 昭和二十六年年間集

編集発行人 柴野宇一郎

発行所 五所川原布屋町

五所川原公民館文化部

非売品 津軽詩話会

千空さんの俳句は35句掲載され、そのうち32句は初出句であることがわかりました。

凡夫凡妻小葱かすかな土の味（他34句）

柴野宇一郎のあとがきには「吾々が紙上に「オギャー」と第一声を上げたのは昨年の四月八日」とあり、詩話会の結成は昭和26年の春であること

がわかりました。しかし、「当初はガリ版刷りの会誌を発起人が作って配布した」との伝聞に反して、この雑誌は体裁、タイトル、発行日、発行人と多くの謎がありました。そこで、当時を知る佐々木榮造さんをお尋ねしました。



津軽詩話会総合雑誌「点」

発起人佐々木榮造さんのお話

「これは、詩話会の創刊号ではありません」

6月の初め、冊子のコピーを持参し青森市にお尋ねすると、今年93歳になられる佐々木さんは一見しておっしゃいました。以下は、佐々木さんのお話です。

▽詩話会の名前は私が提案しました。会誌も私が西洋紙を調達して、夜の12時、1時までやって、200部くらい配りました。3回ぐらい出しましたが、今はどこへいったかわからなくなりました。この雑誌は、私も青年団団長などで忙しくなった頃、短歌の柴野宇一郎がまとめて出したものです。山蘭の門下であった彼はなかなか筆筆者で、この表紙の図柄なども実は自画像で彼の独創です。千空さんとも相談して発行され

ました。公民館主事の葛西國四郎先生は私を公民館審議委員に推薦してくれた人です。彼は県立五所川原農学校時代の国語の恩師で、弁論部の顧問でもありました。五所川原は2回の大火で焼野原でしょう、今のような秩序の整然とした町ではありませんから。会合する場所がないのを葛西先生は青年団の会合に公民館をどんどん使いなさいと言ってくれました。林柁次郎は東奥日報の五所川原通信部にも勤めた人で、実家は五所川原の旅館ですが短歌で一家をなした。長男は私の五小時代の同級生で優秀でした。和田山蘭や加藤東籬に始まり、五所川原の短歌は県内最高であったんです。短歌や俳句をやる人も多かった。詩の頁にある一戸呉六は私たち詩人の先生です。私が子どもの時、県内で一流でした。

▽千空さんの書店（暖鳥文庫）は度々行きました。場所がいいし、千空さんの人柄がいいからね。行けばちっとも嫌な顔をしないで、いつでもやあやあと迎えてくれるんです。千空さんは頭いいものだから、人と話しても俳句をすぐ書くん。詩話会の集まりも欠かさず来ていました。そして、五所川原にとどまっていなくて、青森の俳句会へしょっちゅう通っていたでしょ。これはやるなと思っていました。

▽私は満州で散文や詩を書いて評価を受けました。満鉄の機関紙に載せていた詩をまとめて、詩集を出すところだったのですが、敗戦のため出せなくなりました。詩話会で作った詩は、満州の詩とは全く違うものです。昭和27年、戦後発足した青年会を発展的に五所川原町青年団として再発足させた私は、この五所川原の町をなんと

か立て直そうと意識的に詩を捨てたのです。

佐々木さんのお話から、雑誌発行の事情がわかってきました。作品を掲載された30余名は、前掲の新聞記事にはその名を見いだせない人もいます。解散の影が見え始めた詩話会の活動を形に残そうと、短歌の柴野宇一郎が奔走し、発行にこぎつけたということでしょうか。ガリ版刷りの会誌が確認できない今、この雑誌の価値は決して小さくないといえるでしょう。

「津軽詩話会」と牧水歌碑建立

榮造さんにとって歌碑建立は「文化的な街づくり」という信念の原点となりました。

▽日本の国づくりをしなければならぬ。そのためには、まず郷土の再生だ、自分の郷土に魅力を感じるような何かしらを与えたい、そこで決意したのが牧水の歌碑建立です。牧水は五所川原を訪れているが、くどい短歌ではなく誰にもわかる短歌で、私も好きな短歌です。なぜ牧水かといいますが、日本で知らない人はいない、日本的なトップクラスの人が好きだと言っているのだから、五所川原は絶対いい町なのだとみんなが忘れないように、それが再生日本の根拠になるのだ、牧水の力を借りようと。自分自身もわからないような言葉を使った今までの政治ではなく、これからは違うのだと。それで、五所川原の名前がはいった歌を探せと。選べと。それから始まったのです。

一方、千空さんにも懐かしい思い出がありました。

「……牧水の碑が建ったことを山蘭は非常に喜んでくれました。林柁次郎さんに連れられ

て建立の時に出席になった。私は世話役をやっていたので初めてお目にかかった。モーニングを着て威儀を正しくして挨拶しました。そのとき山蘭に叱られたことが印象に残っています。進行の仕方が悪いといって。こわい人だと思いました。」

〔文芸あおもり〕第143号 和田現―父・山蘭を語る―より〕

戦後5年となる意味を問われた昭和26年

詩話会の結成された昭和26年、終戦5年目の文化活動の在り方が世に問われていました。

▼陸奥新報「地方文化に望む」対談 船水清

／佐藤孝 平成27年1月13日

「終戦のあと一時は開放的な気分になりこれらの人のあとにつづいて新人など、活況を呈した。しかし永つづきはしない、中央でもそうだった、これからだという時期がくる。／機関誌がないので低調とはいえないね、『自負心』をもつ人が幾人か手を組んでゆく、力が湧く、その時初めて有機体になるんだ。地方の新聞も側面的に育てることに、まあいけば愛情をもってもらいたい／県、津軽地方に要望するのは評論的活動を展開することだ」

示唆に富んだ発言をしている船水清。彼の手元にも「津軽詩話会」の会誌は届けられました。船水清は「千空の俳句はみどころがある」と感想を送り、千空さんはそれが忘れられなかったと語っています。お互いを認め合う二人の交流は後々続きました。

敗戦後の日本が自立を模索する時代にあって、文学者の自覚はもちろん、それを育てる側の意識

の向上が求められていました。満州時代から詩作を続けていた佐々木榮造とすでに俳句の道を歩む成田千空のふたりの共通認識は、戦後の社会の復興が進む五所川原にとって、市民レベルの文化的な土壌づくりを望むものであったと思います。

戦後まもなくの、見方によっては軽薄とも評された盛り上がりがあり5年を経過して衰退する中で「津軽詩話会」は誕生しました。市民レベルでの歌碑建立など詩話会の活動は一定の役割を果たし、二人はその後、本格的な地域の俳句会活動や文化的な市政策へとそれぞれの道を歩み始めていました。

「名誉市民はともに――」

最後に、印象に残った佐々木さんお話をもうひとつ。

▽市長として忙しかっていた時代、留守中に千空さんが短冊を投げ入れていったことが数度ありました。「百歳のあしたは雪の野づらかな」だったかな、百歳なんて私を励ましたのでしゅうか。平成16年、千空さんが名誉市民に推されると「佐々木さんや、おめと二人で一緒になればいいな」と言ってね、「市長した者がなるわけねえでばな」と言ったんですよ。「わ、さびしいな」と言っていましたね。

ふるさと五所川原の復興を願った道のりと、千空さんとの飯詰に始まる友情。長時間にわたりお話いただいた佐々木榮造さんとご家族の皆様へ、この場をお借りしてお礼申し上げます。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

成田千空資料再録③

【雑誌『月刊東奥』東奥日報社】（続き）

昭和17年6月号

俳句（太田耳動子選）

「閑古鳥」

佳作

小停車につる想や閑古鳥

佳作

郭公や校長の訓辭やさしくて

方言詩（伊豆能平選）

佳作

命日

青森市 成田 力

窓ふぢさ

おかがて

コンミど

蛙 聞でらキヤ

闇の底から

父ツちやの 軒

聞けで来たオン

昭和17年7月号

俳句（太田耳動子選）

「蚊」

一位（賞）

青森市 成田千空

提灯に來し蚊親しく戻りけり

（評）取るに足らぬ蚊だけに反つて親しさをましてをり、之によつて作者の心境も窺はれる。

方言詩（伊豆能平選）

佳作

「蕨」

青森市 成田ちから

山ごとも

川ごとも

野ごとも

海だきやんねしてまた

蕨ッ！

畠ッ！

呆ほらど

郭公の唄コ

聴でをりすたオン——

募集小説中間報告

入選候補作品二十三篇、左の如し

◇

入選候補作品

△恵之介

（ほか省略）

成田 力

昭和17年8月号

「木下闇」

三位（賞）

下闇の螢火あはれともるなり

（評）題詠の場合は必ず誤りのないやうに一度は歳時記を見てほしい。木下闇とは昼もなほ暗い木下のことをいふのである。さて「あはれともる」が螢の

にふい光を思はせ下闇を生かしてゐる。

方言詩（一戸玲太郎選）

佳作

地蔵様

青森市 成田ちから

田の風ア

青々ど

地蔵様の

面コ吹ぐ——

眼コ細めで

何時めんでも

苗コの
生長様コ
見凝でる
地蔵様ア——

—募集小説選評—

（入賞作品 二篇）

以下、紙数がないので、選外佳作の氏名だけを掲げる。

△恵之介——『恵之介』（成田力）……。

昭和17年9月号

俳句（太田耳動子選）

「秋の聲」

◇一位（賞）

青森市 成田千空

秋聲に想ひはろけくあたりけり

（評）「秋の聲」のかはりに秋の季語をもつてきてゐるのが過半数あつた。必ず

課題を読み込まねばならない。さて此の句の表現は比較的巧みで其のため誠

意にかけてゐると思はれる點はないでもないが、とりとめもない空想に類が

痛くなるのを覺えてゐるやうな作者を想像することが出来る。

方言詩（一戸玲太郎選）

◇入選（賞）

秋

青森市 成田ちから

膝頭のテカレ

凝ッこと

視でらけや

お父ちやど

お母ちやば

矢鱈ね

懷らさて来たア——

（評）——悪童であつた少年の時、叱えでも叱えでも、せい切ラヘンだけアな。し

たけどももうそした時あ來ねエーのし。

昭和17年10月号

俳句（太田耳動子選）

「夜寒」

◇佳作

機をとめて夜寒の吾となりにけり

方言詩（一戸玲太郎選）

◇佳作

案山子

青森市 成田ちから

雨ねも風ねも

耐て來た

此の

ネチヨ深け面コ

見ンでケへ

昭和17年11月号

方言詩（一戸玲太郎選）

◇佳作

昔噺コ

豆殻がら豆殻さ

ばちめで

うづる火ツコア

ちろくど

爺さまの面コ

婆さまの面コ——

俳句（太田耳動子選）

「茸」

◇佳作

うから戀ふ心ともなり茸を狩る

昭和17年12月号

俳句（太田耳動子選）

「圍爐裏」

◇佳作 青森市 力
爐邊の子等粗食になれてみな丈夫

父母の座ありて爐火のやすらかに
青森市 千空

昭和18年1月号

俳句 (太田耳動子選)

「初 日」
◇一位 (賞) 青森市 成田千空

大初日鵬のごとのぼりくる

(評) 厳しく壯んな初日の出を見てゐる
と大鵬が空いつばいに翅を擴げて翔り
くるさまに似てゐるといふのである。

初日の出の此のやうな状態を大鵬に譬
へたのが良い。

方言詩 (一戸謙三選)

◇佳作

ば げ

青森市 ち・か・ら

ほうほうど

とりこぼるちさま

ほきほきど

きこくべるばさま

ほかほかど

やぎだでのいもこアめ

ほろほろど

ゆぎこふてきた

昭和18年2月号

俳句 (太田耳動子選)

「氷 柱」

◇三位 (賞)

青森市 成田千空

わらべらに無尽蔵なる氷柱かな

昭和18年3月号

俳句 (太田耳動子選)

「春近し」

◇佳作

青森市 千空

春近き風に無雙の鳶となり

昭和18年4月号

俳句 (太田耳動子選)

「種蒔き」

◇二位 (賞)

青森市 成田千空

初まいて体温ほのと覺えけり

昭和18年5月号

俳句 (太田耳動子選)

「畑打ち」

◇佳作

青森市 千空

實習の鋏よく揃ふ田打かな

昭和18年5月号

俳句 (太田耳動子選)

「除 草」

◇佳作

青森市 力

岩木嶺を前にうしろに田草とる

昭和18年11月号

俳句 (太田耳動子選)

「雁」

◇一位 (賞)

青森市 成田千空

街の空あなどりがたし雁の陣

【合同句集『海流』】

成田 千空

岩木嶺の巨きく手毬唄やさし
雪切りし街洞然と寝しづまり
白鳥の啼かんとす頸ほそりけり
練船入りつぐ海の盛りあがり
家ぬちの柱が光り夏來たる
佞武多見る人の歩みにしたがへり
晩涼の鶏の眼青き光りあり
頬かむり皆真白なる豊の秋
颱風や街がつしりと組みあへる
時雨寒菜の青々とゆであがり

ガリ版印刷 (奥付なし)

1944年 (昭和19) 青森俳句會發行

【現代俳句集Ⅱ】

成田 千空

「罇」

眇々盗みを累ね來し人とぞ
問ひ答へ凍てゝやものの滓と錆
基地は不毛の磐根すでに雪鏝ふ
破門者にだに似ぬ雪の日雇達
生乾く轍露西亞の春の話
聲高な祈禱然々凍魚の牙
惡所で死にし男の樽樹の氷柱
冬深し秤が元へ戻る音
大聲の際どさも冬館なる
雪繁吹く隙間そのもの生活の罇
笹嫩葉積む雪を抽き一事待つ
草枯るゝ手間暇かゝる時過ぎつゝ
言を遮る會釋互みに暮の街
鷹の羽音掘立小屋に掘立卓
前後不覺の後を慎む菜屑の山
奇禍なきや雪達磨夜々雪肥り
冬の爆竹老いたる島か若き島か
地上五尺の雪や零細集金人
廣場の裏氷柱の奥に無辜の聲
田螺生る山河そつくり元のまゝ

雪礫光り掠めし戀の中
雪間草力に充ちて明の尿
挑み見る生の眼彼岸幽靈圖
冷凍林檎病母の言葉齒より洩る
凍夜梁鳴る亡父も幾たび眼覺めけん
寒鴉千に一つの慈悲もあらめ

×
ひたぶるに木登り童子皮濁れ果つ
冬の朝日口中のものを告げあふ子
冬日柔ら口の邊残る乳の味
大綿の消ぬ間ぞ父を見破る子
生枯笹下校兒いまも猛々し
赤銅色の冬日逃げつゝ「覺えてろ！」

×
寒き柱片眼のぞかす孤兒なるか
湯氣纏ふ吾が春燈に千の孤兒
恨む眼も待ちうける眼も春の孤兒
春の星謎につゝまれ孤兒育つ
雪割草答へ得ず泣く孤兒もあらん
春の孤兒の笑くば「地獄も滅びず」

×
神の留守芥火はたゞのろくさし
春の藻屑胸の悲しみ腹の怒り
双手外被に見つかるまじくゆくものか
睡氣醒しの眠り一刻薪の瘤
峻しく勁く圓かな雪の民家なる
初雪とまがふ春雪崖の胸
誰がための吾が詩春の秣切る
香くはしき轉生一顆蜜柑受く
蛇の跡地に肩代り利かぬ荷ぞ

現代俳句集Ⅱ 頒價 二五〇圓

昭和三十一年六月一日發行

著者代表 金子兜太

印刷者 高柳重信

発行者 楠本憲吉

發行所 東京都港区麻布笄町七九

琅 玕 洞

【現代俳句全集】第四巻

成田 千空

成田千空（なりたせんくう）。大正一〇年
青森市に生まる。戦争中俳句をはじめ、
青森俳句会に参加。昭和二十一年「萬緑」
創刊とともに同誌に拠り、草田男に学ぶ。
現在萬緑同人。現代俳句協会員。

ぼくの作品は敗戦からはじまる。ぼくは愛
国者であつたから敗戦は衝撃であつた。しか
しそのなかに確かな安堵の応えがあつた。自
分の風土が自分の中で息をふき返したことを
はつきり実感した。この実感がぼくの作品を
一途に支えて來ている。自分の風土が自分
とつて掛けがえのないものであると同様に、
俳句もまたぼくにとつて掛けがえのない詩で
あると言える。生きるということ、愛するこ
うこと、自分にとつて掛替のないものは何
かということとは論理以前の事柄であるにし
ても、ぼくにはまだまだ大事な問題である。

大粒の雨降る青田母の故郷（昭和三年—三〇年）
炎ゆる砂地掠めしつばめ懷しや
鵲鴿の胸毛の黄なる見つゝ戀ふる
雲丹の殻・巖の窪み家遠し（竜飛岬行 八句）
五月浪幾岩窟の憂ひの門
岩山の裾なす渚蝶鮮らし
母戀し背筋乾いて汐蟲たち
かはたれの要塞地帯蝸が寄る（旧津軽要塞）
たんぽぽの繁なき礮座幾座
蜻蛉解る左右前方潮の筋
藻屑拾ふ老爺か老婆なる孤り
地の早闊を越えて乞食來たる
身の始末つげんと如く馬橋駆け出す
所詮 business 新雜種を割りとばし
老の赫顔子等の紅顔鰯船來る
妻の眉目春の竈は火を得たり
仔馬に叶う腋四すみあり春を育つ
仔馬の歩み道より發す畦幾すぢ
懸河一途鵲鴿の尾のきしみとふ

妻が病む夏組板に微塵の疵
秒針に見入る病者に夜の霧
燈の隅の優曇華の糸明日は知らず
乳穂のめぐり足形に満てり癒えたまへ
妻を語る秋栗色の大きな眼
眞菰原枯色冴ゆる輪血の刻
冬深し褐色の生の藻を掴み
どびろくに呆けたか玩具に蹴つまづく
寒托鉢戸開かずば去る、凛し
膝立てゝ臥す友冬の斧の音
いで發つや鳴る空車木の芽吹く
酷寒の迅脚の牛怖ろしや
行方茫洋草穂に牛の毛深き眼（岩木山麓 四句）
墓の波紋かりそめならぬ砲音ぞも
墓土色根こそぎ松の木が倒れ
牛の丸胴菜種は青き莢立てゝ
どさん馬の脾腹の渦毛たける秋
秋は疊に針をひそめし眞綿など
美貌の狼夏を涼しく居つらむぞ（原爆の夜へ一旬）
迷はぬ道徑ひをるや蚊喰鳥
青田中無為に没り日の的となる
鳶巢立つ稲妻形に朝の囁
歌聲や藁塚は地より鉢開き
鷹羽搏つ奇勝不毛の地ならずや
足長蜘蛛地にまぎれなき敗者の碑
主命一切眼を吊りあげて泳ぐ大
鷹も翼重き日もあらむ荒布乾らぶ
おけら短命いたる處に燈がついて
耐へよとや眞冬一と間に鹽と綿
林檎の芯假の友てふ友あるまじ
荒地野菊禱りの太鼓暮るゝまで
雷打つて奇しく明るく竝ぶ墓
ふところに跳ね込むいとど榮えぬ代ぞ
芥子の密培まがりくねりて溝流れる
誰に待まん「稲刈下駄」に赤ら足
蜩蟬母音いきづく子の片言
秋空の無垢に眼くらむ生身なる
雪卸しあぐねて幾日人に疎し
一とかぶり囁み桃呉れし父なつかし
咳ぶくに軋む床板不敵な月
聖夜母座吹き消し匂ふ蠟燭
冬深し秤が元へ戻る音

林檎芳香燃えつゝ昇る星のあり（昭和三年—三年）
雪の聖誕祭樹燈と食べ物に満てる店
逝く向きに棕鳥來るひゞき新墾地
人の地なる堅固な柵に寒鴉
農の墓地孟夏後塵絶え間なし
棚田植う屈身深く蒼き穹
玫瑰の残留海へ走る尾根
野牛莠の厚き葉沖は言を吞む
田堰細分夏日あざなひ流る水
裏山は下閣遶し土著漁夫
屋根石と浦の流れ藻曇り久し
屋根石に夏寂ぶ光り地の鱗屑
沿海漁區北風吹き通す錨穴
ざら鹽の黄に染む埠頭夏話る
草枯るゝ迂路の電柱唸り立つ
墳墓の地歴々草に牛の尿
道遠し子の草笛の息長し
蝶迅し瀉干拓の大環に
拓く一地日に確むる土龍の屍
岸を削ぐ流水草に鎌仄めく
野に捨てし嬰兒籠野分吹き通し
捨嬰兒籠草むす里程はかり得ず
鵲の糞草莽の墓かへりみし
晩稲抜く心膽あつて老ならむ
山あざみ靄立ち吹かれ北の遺跡
日の刻や遺跡につゞく小田の青
雨の浮葉なまなかに飛ぶ鴉なり
燕乏し椅子擦れ光る汝が吾が服
木菟の出時碌々厚き茅廬
干菜の尾やみくもに飛機ひゞき去る
睦み蝶磨くごとに代均す老
蝶絶えて空より蒼き陥没湖
猫が噓する夜陰廢娼以後如何に
寒星明暗吾が身の中に眠る妻
雪の群鴉めいめいの眼の近し遠し
去年今年一と擦りに噴くマツチの火
廻り冴ゆる獨樂や絶えざめ濤・轍
農の終焉壁を一と重に干菜鳴る
農幾代の墓穴ねばつく雪と土

成田千空鑑賞 北野民夫
（5ページにわたるが、省略）

昭和三十三年十一月二十五日印刷
昭和三十三年十一月三十日第一刷發行
現代俳句全集 第四巻 定価二八〇円
編集者 赤城さかえ・石原八束
志摩芳次郎・原子公平

東京都文京区春木町一丁目二十三番地
発行所 北野民夫
東京都板橋区板橋町六丁目三二八九番地
印刷者 山田博

東京都文京区春木町一丁目二十二番地
株式会社 みすず書房
振替 東京 一九五一三二番
電話 小石川（92）〇八六三番
〇九二八番

【合同句集『水塔』】

山河抄

成田 千空

林檎のように赤い頬をしたリアリストにな
りたい。見ないうちは信じない糞リアリスト
ではなく、信じない限り見ない眞のリアリス
トになりたい。

雪割ると仄めくみどり鳩の胸
睫毛は蒔雪穴の中あかあかと
幹黒く愛憐の黙冴ゆる村
屋根草の枯れ色なだれ伏す晚餐
空の鳥籠篠つく冬の雨となる
絶えぬ難民日の斑南瓜に灼付いて
花咲く空起耕のひゞき手の中に
履き踏みて緊まる地下足袋北の声
泥の蟻切り株に風ひびくなり
残る寒さ代の翳を置く崖の穴
軟体のひやりと夜へ根切虫
ささら氷雨「内をのぞくな子が泣くぞ」
屑藻を發つ揚羽一片アトム年代

発行所青森県八戸市番町五村上方・森の

会

【合同句集『修羅おとし』】

緋の息吹

成田 千空

例えば、一つの石を石としてうたい、石を石
たらしめている条件をうたい、石の変貌をう
たい、雨をうたい、風をうたい、夢を詩うこ
とによって、石の存在を見事に凝集したよう
な作品をいつか必ず創りたい。

わが巢一つ林檎一簾に緋の息吹

翔ぶ鷹の視野に母船を呼ぶ男

黒芽えて声なき鴉岐路の標

岐路はわがそのもの青木の青依然

飯面の視野枯木の枝の中の月

雪繚乱馬穴に宣伝カーの唄

寒むや立像吐息まじりの染流行る

馬炭のくびきの軋み紛る市

暁の雪降りあざなふも農墳墓

冬の鼻紅運とし酔ふつらい奴

うなる暖炉わが詩はわが身の錘り

糝欲るや霰一散髪にからむ

指勁く餅食ふ仲間川を浚ひ

樹に雪の膠着の髣髴かぶ艦

商守る妻飛雪いくたび扉を叩く

とぶ燕鉄片のごと詩なき日

大根・蕪その葉も洗ひ死ぬるまで

冬菜洗ふ波紋を交はし嫁どうし

農に嫁す金襴嵩む夜の淡雪

息長く白し婚祝ぐ農夫の唄

小雀の屎来る朝までの永き刻

菊池鮎太を悼む 一句

明るみに翳る藁香もう居ぬ君

渦を横切る矢のごとき蝶デス・マスク

離別さだか手袋につく橋の鏑

馬糞塵妻の物指しあてどなし

受難節赤き獣肉雪降らす

凍菌ブラシ唾ふや政事読み余し

世故悍ぞや春陽ににらす螺旋階

艶笑譚雪中曲々林檎の木

鶏の雄声林檎万朶に花葉の芽

青ざめし眠りの記憶胡桃断つ

鳶巢立つ殊に西方透きとほり

漁夫の焚火濁波も裾ひろげつゝ

砂の風紋蝶より低く果つる村

片削げに青む寄生木防砂垣

こだま欲し干潟に貝の放射線

弑逆より館滅び墓太りけむ

奈良北州を悼む 一句

雨の新樹汝が薄命の白枕

卒業の盲児、掌、熱からむ

ミクサーの咀嚼ざらざら蛾の出時

蛾の出時際どくて貨物エレベーター

鋤く土のはしくれせめぎあふ谷や

煙炭の黒の極みに一飛鳥

雲雀まぶし竜骨切線組みあげて

試射灼けて背後にまくれ上る道

耕馬の胴黒奴一揆の報ここに

月の鉄路格動まざと輪つば帽

一と言がひと鞭の主にけらの聲

墓鳴いて破落戸の如空瓶ども

薔薇の夜気身にたゝみ起つ足塞子

成田千空（力）・39才・書店経営・五所川原市

新町五五・「萬緑」暖鳥 同人・第一回萬緑

賞授賞・現代俳句協会会員。

合同句集『修羅おとし』後記 成田千空

四年前、八戸在住の俳句作家たちによって
スタートを切った合同句集「雪」それに続く
「葉脈」は、八戸に於ける新しい作家層の
存在とそのエスプリを鮮明に示した。更に、
昨年の「雪像」は、弘前の竹鼻瑠理男、青森
の新谷ひろし、京武久美、徳差青良たちが新
たに参加したことによって全県的な視野を得
るに至り、各々の個性と世代の断層を一層多
様に示したばかりでなく、その作品水準は、
村上しゅらの角川俳句賞授賞というケースに
よるまでもなく、現代俳句の水準に接近しつ
つある様相を帯びていたことは明らかである。

今度の第四アンソロジーには更に青森在住

「季節」の立石月歩、上北郡甲地在住の萬緑

同人米田一穂と私が参加した。すでに当初と

は異質のアンソロジーに生まれ変わったと判断

される。地方俳壇とか中央俳壇とかいう意識

はナンセンスにちがいないが、地方には地方

の状況があることはたしかである。風土の特

色はいうまでもない。しかし現代俳句の諸問

題について考えるとき、いちばんはじめに気

をふさぐのは地方の低迷ということである。

この低地帯から飛び立つことは作者個々の自

由であるにしても、その自由をわがものとす

る人々が一団となって、実作を発表する気運

こそ大事にしたい。そのことが念頭にあるか

ぎり低地帯から逃避する魂胆がないことを示

す。私たちの実作がそれぞれ構造を異にしな

がら一つのアンソロジーを生み出しているこ

と自体、決してスマートではなく、むしろ泥

くさいほど地方的だが、大層まじめなのであ

る。私たちはここに生きている。ここは一つ

の主義によって舗装された場ではなく、いく

つかの轍が入り組み、もつれ合った共通の場

である。私たちがここに生きている以上、お

互いの轍を見極め、理解し、批判する労を惜

しんでは、諸行無常の鐘を聞くしかないこと

になろう。じつに安心ならない場なのだ。第

一回から第三回までの句集は、ささやかなが

ら脱皮と実りを示して来た。今度の第四句集

は果してどれだけの可能性を示しているか、

ひとの意見にもよく耳を傾けよう。

句集修羅おとし（孔版）限定版

20120 頒価二〇〇円

昭和三十五年六月十五日発行

発行人豊山千蔭 編集人村上しゅら

発行所八戸市内丸16豊山千蔭 修羅おとし発行

し発行

句集「氷塔」（孔版）限定二百部

20099 頒価三百円

昭和三十八年一月三十一日発行

編集人村上しゅら 発行人豊山千蔭

鰯ヶ沢・高沢寺 二句

揚羽躍る男根の石女陰の岩

蝶散つて紺大團の男神

丸太渡ればぬくぬく十年来の友

潮と睦む瀬音青増す苗の列

叙磨ぐや五月朝光まきちらし

少年に血まみれの魚夏鮮らし

白泡たぎる北進航路五月の陽

雲雀揚げて漁夫の肋間楔形

泥の息吹き振れて燃ゆる田植の火

泥乾く午後の鈍痛苗千把

廃港の岩より暮れて男の咳

屋根根石にとぶ草の梁沖晴れよ

筏のごと風垣組まれ海霧

藪がらみ咲く玫瑰へ沖の声

露一と粒の光陰石を囓む根株

驪馬二才地のあまたの窪みはや

馬売らる野分のくらさ尾につつま

鞭がらみ鳴る葦原し没り日の巢

萱を刈りその根株薙ぐ母子たり

煙りしみるなじみの小道萱車

泥炭盪火もののかたちの灰崩れず

湿原をよぎる鎌見え露微塵

耳ふかきめくらの祭火照る石

川は海へ頭陀の袋もふくらむ秋

夜を醸もす太鼓のこだま・濁り酒

陽も鬱金指ふかめ刈る峽の稲

二百十日烈々と焚く竈の火

螻蛄ひそむ農の重みの足音や

ごつそりと日曆を剥ぎ鯛うまし

炬火赫々と婆健啖に健忘に

落穂拾ふ先き先きの光母の声

暁の太白爛々と餅つき上げる

蝶も稀の渴のしがらみ骨いろに

汝が骨を経て吾に到る寒風か

雪夜病む子に天馬の物語り

わが山河大綿小綿光り擦る

千空資料を当研究会に寄託

千空資料の寄託をうけ、7月1日、市子夫人立ち会いのもとに千空宅において資料（句帳・日記・写真・句集・俳句雑誌など）の選別を行いました。会員の西谷ともえ・斎藤美穂・成田奉生さんがご奉仕くださり、私と4人1日かりで1000点を搬出しました。整理がつき次第、内容についてご報告いたします。

（写真は選別の様子と物置に積まれた資料）



寄贈感謝

齋藤美穂さん

①俳句雑誌『暖鳥』千空関係コピー

昭和22年5月号／23年3月号 11・12月合併号／

24年1月号 10月号／25年6月号／26年6月号／

11月号／27年3月号／28年1月号 9月号

②俳句雑誌『萬緑』千空関係コピー

昭和26年6月号 12月号

③『陸奥新報』昭和27年コピー

津軽詩話会 6枚／むつみ吟社 1枚

五能線俳句大会 2枚

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）

2. 回想の成田千空（2000字以内）

締め切り 第4号は10月末、到着順に掲載します。

* 稿料は差し上げられませんが、掲載紙をお送りします。

送り先（下段発行所、青森文芸出版あて）

* Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会員名簿（39名）

〈青森市〉浅利康衛、西谷ともえ、野沢省悟、吉田州花、成田奉生

〈平内町〉佐藤陽子

〈弘前市〉阿保子星、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、館田勝弘、土田紫翠、三上弘之

〈藤崎町〉清水雪江

〈八戸市〉上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次

〈十和田市〉日野口晃、米田省三

〈五所川原市〉一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、野村正彦、浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子

〈板柳町〉木村武彦

〈深浦町〉草野力丸、山本こう女

訃報 佐々木とみ子さんが8月11日逝去されました。

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

☆北極星☆

○千空資料の中に雑誌「文学」や「詩学」、岩波講座「日本文学」などもあった。療養しながら真剣に学んでいたことが窺える。「読書メモ」には、療養中に読んだ本の要点を記している。毎週、仲間と研究句会を開いていた時期もある。句帳や日記、原稿控も残されていた。これからの研究に生かしていきたい。

○「執筆者が多彩で、内容も回想あり資料あり研究ありで、興味深い」と、『千空研究』はおおむね好評。文学芸術のほか、哲学や科学まで関心の深かった千空像が、次第に明らかにされる。

○「成田千空における風土と民俗」を執筆下さった小池淳一さんは、大学院生時代に角川書店でアルバイトし、『ふるさと大歳時記』の編集に携わった。千空句集『地霊』『人日』のカード作りをしていたと聞いたのは、今から20数年も前のことである。その後、雑誌『俳句』に「歳時記と民俗」を連載、また『伝承歳時記』『飯塚書店』の著書もある。

○次号の締め切りは10月末。どなたでも自由に送って頂きたい。原稿は随時受付けており、締め切り日まで到着分は次号に掲載します。

2015年8月20日発行
会報『千空研究』第3号 非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-355-5323
FAX 0173-355-8414